

和歌山県知事指定郷土伝統工芸品

ごぼうにんぎょう

御坊人形

昭和63年指定／指定された地域(御坊市)

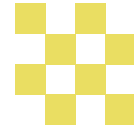
子どもの幸せを祈る初節句の“天神さん”

無病息災を願う子どもの節句。日本ではお祝いとして人形を贈る風習があります。一般的に女の子なら雛人形、男の子なら五月人形をイメージしますが、御坊市を中心とする紀中・日高地方では、「御坊人形」が伝わってきました。天神さんや俵持ち、鯛狎、三番叟などさまざまな種類の御坊人形が仲良く並び、子どもたちの健やかな成長を見守ります。



● 御坊人形の制作者について

御坊人形は、田中家の人形師によって作られてきました。始まりは明治初期。獅子頭と人形の制作技術を修得した兄・山本幾右衛門さんを手伝い、田中庄助さんが人形専門で制作を始めたそうです。その後、豊太郎さん、正助さん、丈助さんと人形づくりの技術が受け継がれてきました。現在は制作が中断されている状況です。



学問の神様と縁起物が仲良く鎮座

今でもまちの重鎮たちに話を伺うと「天神さんを飾っていたよ。」と、女性でも男性でも、決まってそう話します。天神さんは言うまでもなく、学問の神として親しまれる菅原道真。この神様にあやかっ、子どもの成長を祝う初節句に贈られていました。大きさはさまざまですが、大きいもので高さ40cmくらいあります。お顔はふくよかで、凛々しさの中に優しさともくもりを感じさせる雰囲気。男女の区別なく天神さんを飾り、これと一緒に、俵持ちや鯛狎、三番叟など、縁起の良い練物人形が親戚から贈られたといいます。御坊人形は、使用材料や仕様によって大きく張子と練物に分けられます。

仕入れの雑貨屋が職人へ転身

そもそも人形の起源は古く、愛玩や鑑賞のため以外に、信仰やまじないの用具として、人々の暮らしの中で重要な役割を果たしていました。御坊人形の登場は、明治初期。代々、田中家の人形師が4代にわたって受け継いできました。きっかけをつくったのは、東町で荒物を主とする雑貨屋を営む山本幾右衛門さん。わざわざ大阪まで出向いて仕入れていた節句用の人形を、自分でも作れるのではないかと思ったのが始まり。大阪の職人を自宅に招いて技法を学び、獅子頭と人形を制作。ここから弟の田中庄助さんも手伝い、後に山本家が獅子頭、田中家が人形を作るようになっていきました。



名匠の工芸品として全国から注目

御坊人形の最盛期は、明治中期から昭和10年代。戦後の昭和23～24年頃もなかなか忙しかったといいます。転機はガラスケースに入った都会的な節句人形の流行。徐々に、節句の祝い人形から郷土人形とその役割は変わり、大阪のデパートなどでも展示されたこともあります。もともとすべてが手作りで、入手困難な逸品。数の限りも見えてきました。御坊人形は、1世紀以上にもわたって愛されてきた、御坊市を代表する伝統の工芸品です。御坊市役所の市長広接室にも、まちを代表する工芸品として御坊人形が飾られています。

【御坊人形の種類】

御坊人形は使用する材料や仕様によって、張子と練物の2種類に分けられます。張子は、元型に紙などを貼り重ね、乾いてから元型を抜き彩色を施して完成。天神さんや張子の虎などを作ります。練物は、ひまこ(小麦)と粉を混ぜ、型に押し込んで造形。内部をくり抜いて乾かし、色付けを行います。



俵持ち

力士が片肌を脱いで、力強く米俵をかつぎ回している縁起物。着物は古風な紺がすりで、俵は黄色調。ぬくもりのある練物です。



鯛狎

愛嬌のある表情が可愛い練物。白色で耳と尾が黒の犬が、縁起のいい鯛に寄りかかって並んでいます。基調の白に鯛の赤が映えます。



三番叟

三番叟を踊る能人形を模した練物。そもそも能楽で狂言役者が演じる演目。五穀豊穡を祈り、種まきを思わせる鈴ノ段の所作です。



虎加藤

戦国時代の武将・加藤清正が朝鮮で虎を退治した故事にちなんで作られた練物。日の丸の扇を片手に、虎に乗りかかって勝利を宣言。

まちの歴史を紡ぐ民俗資料として

御坊人形は、各家庭で子どもの誕生を祝う節句の人形。そのため飾り方や贈り方にも、さまざまな諸説があったようです。一般的に広まったのが張子の天神さんで、男の子ならそこに張子の虎や鯉のぼりを。女の子なら立雛(写真の左下)と呼ばれる布と紙で出来たお雛様が贈られていました。一年を無事に過ごし、次の節句には縁起物の練物と、年々人形が増えていく家庭もあったといいます。現在、その風習も風化。家庭で飾られ、その役目を無事に終えた一部の御坊人形は、御坊市歴史民俗資料館に展示・保管されており、今後も資料を収集し、保存・管理に努めていきたいと話しています。



御坊市歴史民俗資料館／和歌山県御坊市塩屋町南塩屋1123(御坊総合運動公園内)



(御坊市役所市長広接室)